

鈴木治行・室内楽レトロスペクティブ 1991-2016

Haruyuki Suzuki Chamber Music Retrospective 1991-2016
WINDS CAFE 254

2018年2月18日（日）14:30開演
カーサ・モーツアルト

このたびはWINDS CAFEの企画の一貫として、鈴木治行の作品をまとめたさやかなコンサートを企画していただけた運びとなりました。

主宰の川村龍俊さん、僕の個展を提案していただいた岩瀬龍太さん、それに対応してくださった其他演奏者のみなさんに感謝いたします。ありがとうございました。

＜プログラム＞

Souvenir

稜線

三角洲

想起一汎回

Eternal Stumbling Meteor Fragments 殺しの烙印

● Souvenir (1996) for guitar and piano

僕の音楽には90年代以降徐々に分化してきたいいくつかの方向性があるが、この『Souvenir』はその中の「反復もの」と呼ぶ路線に属する。ギターとピアノというあまり合わなそうな2つの楽器を組み合わせてどうやって音楽を作るかという時に、まず、音量的に普通に重ねるとピアノの方が勝ってしまうのではないかという懸念があったので、この2楽器をほとんど重ならないようにキャッチボールする形で音を紡ぐというアイデアが生まれた。なお、この作品ではギターの6本の弦は2本ずつ同じ弦が張られ、かつ4分音ずれて調律されている。2楽器が1本の線をバトンタッチしながら紡いでゆく（終わりの方では徐々に重なってゆく）。その線は一つの原型がゆるやかに反復されているのだが、進むにつれてギターは4分音ずつ「陥没」し、それによって線の形が変形してゆく。

●稜線 (1996) Ridge for flute

『Souvenir』と同じ年に作曲されたこの作品もまた「反復もの」に属する。僕にはソロ楽器の「句読点」というシリーズがあるのだが、ソロだからといってみな「句読点」なわけではなく、この曲のように「反復もの」なソロ曲もある。昔、コピー機で同じ絵を繰り返し拡大コピーしてゆくという遊びをやってみたことがあるが、絵の細部がどんどん顕微鏡的に拡大されてミクロな世界に入り込んでゆく体験は実にスリリングだった。この作品でも原型が循環しながら進んでゆくのだが、元の線の中の一部だけが徐々にクローズアップされて拡大する一方、その他の部分は徐々に消滅して（死んで）ゆく。線の細部がミクロな世界に入ってゆく時に、細部の表面を描写する必要性から、僕にしてはいつになく特殊奏法が多用される結果となった。

●三角洲 (1991) Delta for flute, clarinet and piano

今回のプログラムの中で最も古い作品。この曲も非常に反復的なのだが、「反復もの」を意識し出してからの反復の作法とは反復のやり方が異なっており、いわば「反復もの」がスタートする直前の段階の曲といえよう。この曲は11の部分に分かれているが、後になるほど時間が長くなってゆく。初めは複数の素材の各頭だけが見えていて、それが点つなぎされて一本の線を作っているのが、次第に各素材の頭から少し先までが見えてくることで、線が変形してゆくので、当然の結果として後になるほど長くなるのである。ある意味かなりシステムティックに作られている。ここでは響きよりむしろ徐々に変化するプロセスを聴かせることが目指されている。

●想起一迂回 (2016) remembrance — detour for guitar and narration

今回唯一の「語りもの」の一曲。「語りもの」はこれまでに6作あり、これは現時点での最新作。すべてCD化されているので、ご興味を持たれた方は後で検索してみてください。既にいろんなところで語ってきた気がするが、僕には映画の影響というのは大きくて、「反復もの」もフィルムの編集という作業のあり方に大きな示唆を得ている。そしてこの「語りもの」はまたそれとは別方面からの映画の影響の表れなのだろう。このシリーズでは、音とイメージの関係性についての考察が音楽になっている。語られるのは音楽についての言及（自己言及）、小説、演奏当日の新聞、自転車の説明書の4種類で、それら性格の全く異なるテキストが音楽と織りなす関係性の中、前景／後景の間で浮き沈みする。

●Eternal Stumbling (2006) for violin, violoncello and piano

これはチャップリンの有名な映画音楽の編曲作品ではあるが、コンセプトが完全に「句読点」のそれとなっている。「句読点」は既に述べたようにソロ楽器のシリーズ名だが、そのコンセプトはアンサンブルでも実現できる。自然に流れるような音楽ではなく、ギクシャクし、つんのめる時間体験の方に生理的に惹かれているうちに、いつの間にか異物を挿入して自然な流れを断ち切ってゆく音楽を始めた。切断が有効であるためには前提としてまず連続的な持続を用意する必要がある。そこでまず自然に流れるチャップリンの美しい音楽を持ってきて、そこに半端なタイミングで亀裂を入れてゆく。この曲にはもうこれ以上の説明は不要だろう。京都の元立誠小学校で行われたくチャップリン映画音楽コンサート>で初演された。

● Meteor Fragments (2013) for violin and violoncello *日本初演

これは再び「反復もの」。素材のジョアン・ジルベルト「**Chega de saudade**」（想いあふれて）はかなり断片化、変形され、よく聞くと、元の曲の断片らしきものが時折垣間見える。「反復もの」ではしばしば行うのだが、反復の周期がゆったりとなったりめまぐるしくなったりと膨張／伸縮を繰り返し、また、キーボードのベンダー機能で旋律がグニヤリと歪むようにメロディはしばしばとろけて溶解する。結果的に無調的でノイズ成分も含んだ前衛的な響きになっている中に、妙に調性的なフレーズらしきものがときどき紛れ込んでいるのはちぐはぐで気持ち悪い。曲名はジグマール・ポルケの作品に由来しているが、断片=Fragmentsともかけられている。ジュリアンヌ・ドロームとガブリエル・プリンによって委嘱され、モントリオールで初演された。

● 殺しの烙印 (1995) *Koroshi - no - rakuin*

for alt-flute, clarinet, viola and violoncello

これもアンサンブルによる「句読点シリーズ」の一曲。タイトルはいわすと知れた鈴木清順の1967年の日活映画からいただいている（恐れ多くも）。鈴木清順の存在というのは僕には非常に大きくて、特に切断的な時間の扱いにおいて重要な示唆を受けた。切断的ということではゴダールからも影響されているかもしれないが、自覚的なのはむしろ清順の方だった。というか、元々自分の感性が切断的だったから清順に惹かれたのかもしれないが、その辺、卵と鶏のどちらが先だったかは今となっては自分でもよくわからない。清順へのオマージュでもあり、またその挑発性にあやかるというか、挑むというか、そんな思いで当時こんなタイトルをつけた。音楽はこの映画と直接の関連性はない。ここではハイドンの弦楽四重奏曲を拍を飛び飛びで抜いてどことなくいびつにした素材が連續性を形成する「地」となっており、そこに様々な異物が乱入してくる。

▼プロフィール

● 間部令子（フルート）：桐朋学園大学音楽学部演奏学科卒業後、渡米。カリフォルニア芸術大学(CalArts)音楽学部修士課程を経て、カリフォルニア大学サンディエゴ校(UCSD)音楽学部博士課程現代音楽演奏学科修了。博士論文は『無聲音を伴うフルート演奏の手引き』。ジェームス・テニー、ロージャー・レイノルズなど著名な作曲家のソロ作品初演のほか、新鋭作曲家の作品紹介にも努め、演奏録音がヨーロッパ各地の音楽祭や音楽教育機関で取り上げられる。2006年競楽VII優勝、第16回朝日現代音楽賞受賞。

● 岩瀬龍太（クラリネット）：桐朋学園大学卒業後、ベルギーのアントワープ王立音楽院とモンス王立音楽院にて、ワルター・ブイケンス、ロナルド・ヴァン・スパンドンクの両氏に師事。これまでに、ピエトロ・アルジェント国際室内楽コンクール第1位。マルコ・フィオリンド国際室内楽コンクール第3位。パドヴァ国際室内楽コンクール第3位。夏期国際音楽アカデミー（ウィーン）においてバルトーク賞を受賞。ウィーンモデルン現代音楽祭をはじめ数々の音楽祭に招聘。

- 亀井庸州（ヴァイオリン、ヴィオラ）：5歳からヴァイオリン、18歳より尺八を始める。2000年ごろよりヴァイオリンを使って同世代の作家たちと新たな音楽を創作する活動を始め、2005年よりベルギー、リエージュ王立音楽院へ留学、20世紀の主要な作品を勉強する。同時に、古楽器を使ったピリオド演奏にも取り組み、古楽と現代音楽の両方を学ぶ。2007年より日本に帰国。湯浅譲二氏の個展を契機に、チェリストの多井智紀氏らと弦楽四重奏や多くの室内楽での活動を始める。現在は主に古典尺八楽と、ヴァイオリンでの現代の作品初演の二つを軸に演奏を続けている。
- 細井唯（チェロ）：東京音楽大学弦楽科を首席で卒業。在学中に給費奨学生を得る。卒業演奏会、読売新人演奏会に出演。プロジェクトQ第10章、ビヨラスペース2013ヒンデミット弦楽四重奏曲全曲演奏会、プロジェクトQ第11章、JTが育てるアンサンブルシリーズ、北九州国際音楽祭、等に出演。ウェン＝シン・ヤン、ダヴィド・ゲリンガス、グスタフ・リヴィニウス、中木健二、フランソワ・サルク各氏のマスタークラスを受講。
- 山田岳（ギター）：ギターを中心に様々な撥弦楽器の演奏を得意とし、古楽から前衛まで時代にとらわれない幅広いレパートリーを持つ。国内での活動のほか、これまでにドイツ、ベルギー、中国、マレーシア、シンガポール、ベトナムの各都市に招かれ公演。2017年、ALM Records より初のソロアルバム「Ostinati」をリリース。「レコード芸術」誌にて特選盤に選ばれる。第9回現代音楽演奏コンクール"競楽IX"第1位。第20回朝日現代音楽賞を受賞。
- 川村恵里佳（ピアノ）：東京音楽大学器楽専攻（ピアノ演奏家コース）卒業、同大学院修士課程器楽専攻鍵盤楽器研究領域（伴奏）修了。在学中、レインボウ21・サントリーホールデビューコンサートに出演。第11回現代音楽演奏コンクール"競楽XI"にて、審査委員特別奨励賞を受賞。現代音楽の演奏に積極的に取り組み、新曲初演を含む数々のプロジェクトに参加する。ハニヤン現代音楽祭（韓国・ソウル）、ウィーンモデルン音楽祭に招聘される。東京音楽大学非常勤研究員。
- 鈴木治行（作曲、語り）：東京出身。1990年、作曲家グループ Tempus Novum 結成。1995年『二重の鍵』が第16回入野賞受賞。2005年ガウデアムス音楽週間、2006年イタリアのサンタマリア・ヌオヴァ音楽祭、2009年ニューヨーク「Experimental Intermedia」、2016年ニューヨーク「Music From Japan」参加など、作品は国内外で演奏、放送されている。1990年代以降、反復もの、句読点、語りもの、伸縮ものなどの複数の路線を往還しながら作曲を続けている。他ジャンルとのコラボレーションにも関心を持ち、映像との仕事として『M/OTHER』他多数。またサイレント映画ライブ演奏も行う。美術、演劇寄りの仕事として、『循環する日常生活』、（1996年、六本木ストライプハウス美術館）、『饗宴のあと～After The Symposium』（2015年、東京都庭園美術館）など。